私の父――明治生れの日本人男性像

鹿児島大学医学部卒
元鹿児島市医師会員　**武田　元彦**

現在私は北九州市に住んでいるが，元々は鹿児島市出身の神経内科医である。それも2年前に勤務医を辞し，今は医師としては働きを終えている。卒業は昭和38年であり，尊敬する学兄に鹿島友義氏がおり，その他聡明な元鹿大放射線科助教授の伊東祐治氏，温厚で優秀な開業医の前田 忠氏などがいる。現在北九州市と鹿児島市は新幹線で1時間半で往ける隣の都市であり，かつて私は判読してほしい心電図をもって新幹線に乗り，鹿児島市中央駅で鹿島兄に会って判読してもらい，そのまま又新幹線で北九州市に戻ったことがある。私の父は明治16年生れで，西郷隆盛銅像の近くで50年余，耳鼻咽喉科の開業医を務め，私もそこで生れ育った。父は明治生れの典型的な日本人男性で，いろいろ武勇伝があり，私も86歳になり，余生が短くなったので少し云い伝えとして父の後半生のことを書いてみたい。昔の人間の回想録としてではなく，一人の明治の日本人男性像として読んでいただけたら幸いである。かつて父自身が自らのドイツ留学時のことを鹿児島市医報に二度にわたって投稿しており（鹿児島市医報第3巻9号および10号――題「戦時独乙（ドイツ）脱出の記」），私のこの記事がそれと少しオーバーラップするところがあることは御諒承願いたい。

明治時代の日本は中学から外国語はドイツ語を教えており，元々語学が好きな私の父は，ドイツ留学の時は既にドイツ語はある程度堪能であったようだ。というのはドイツ留学の間，かの地で困ることもあまりなく，二人のドイツ女性との交際もあったらしいのである。父が日本に帰って，鹿児島での，大分後のことになるが，私の兄たちが七高（鹿児島の旧制高校）でドイツ語を習いはじめると父がもらったドイツ女性からのラブレターを読むことが，我が家のならわしのようになっていて，私も読んだ記憶がある。又ずっと後々の話になるが，私が父の死後母を伴ってミュンヘンで父が住んでいた家を，父が当時もらったハガキの住所をもとに探し当てたとき，ミュンヘン大学の職員が私の父の手帳のドイツ語の走り書きを読んで，私に貴殿の父君はドイツ語が相当堪能であったようだと感想を述べて呉れた。父が留学を終え，ヨーロッパを旅していた1914年にオーストリアの世嗣夫妻がセルビアの一青年に殺され，これが発端となって第一次世界大戦が始まるが，その動乱の中をヨーロッパ中，そして英国ロンドンまでも一度ならず二度まで訪れ，パリに行ったり，又ミュンヘンにまい戻ったり，最終的にはロンドンで日本郵船に乗って帰途につくまでの父の足跡は唖然とさせられるものがあるが，そこに明治の日本人男性の剛胆な姿をみる思いがする。（この足跡の詳細は父自身，鹿児島市医報に投稿していることは前述した）父はドイツ留学から帰国して，京都大学耳鼻咽喉科の職につくが，当時の京大耳鼻咽喉科は初代教授に，あの有名な日本の哲学者和辻哲郎の実兄和辻教授が赴任しており，父に今度鹿児島市に県立病院が設置されるが，そこの耳鼻咽喉科の部長に赴任して呉れないかと問うてきたらしい。医局の父の同僚は，みな父がこの要請を断るものと思っていたが，父はそれに同意して，父の同僚はみな驚いたようだ。父は実母が宮崎で存命であったので，近

くにいて母の面倒をみられると思い，この要請に同意したらしい。そして鹿児島に赴任するが，当時のサラリーが鹿児島県知事のそれより高かったらしく，国が当時，鹿児島に県立病院を設置することに積極的に動いたと思われる。父は耳鼻咽喉科の部長の職責をしばらく果すが，やがてその職を辞し，鹿児島市で耳鼻咽喉科を開業する。私が生れたのは，その後の昭和10年であるが，私は2歳の時母と東京にいて，そこで恐らく結核性の右内耳炎を起し鹿児島に戻り，父の徹底的な根治手術を受け一命をとりとめたのである。未だ世界に抗生物質のない昭和初期のことである。それから健康をとり戻した幼児の私は，よく我が家の門のあたりで遊んでいたが，我が家の門の前を通り過ぎる人々が，我が家の門に向って頭を下げて行くのを何度となく目撃したことを思い出す。父は開業の途中，熊本大学から教授として赴任して欲しいという要請を受けるが，親しい開業医仲間から，子供10人いて，大学教授のサラリーで，どうして生活してゆくのかと諭され，心ならずも，この熊大からの要請を断ったようである。私は，父は開業医より大学で教鞭をとった方が似合う性分ではなかったかと思っている。父は毎日の多忙な診療を終えてからもドイツ語で書かれた医学書を読んでいたことを，私はカンガルーの子供のように父のふところにだかれながら見ていたことを思い出す。次に父の晩年になる話であるが，父自身奥歯が当る口腔粘膜に難治性潰瘍ができ，ガンを疑い自らその部位を切除し，鹿児島大学医学部の教授はみな父を知っていたので，偽名（ギメイ）を使って，その切除片を鹿児島大学病理教室に提出した。結果はガンであったので，当時私の長兄が京都大学耳鼻咽喉科の助教授をしており，父は京大に行き，息子の徹底した手術と放射線治療を受け再燃，転移は全くみられず危機を脱したことがあった。この原稿もそろそろ終りにしたいが，父の最晩年，私が渡米する前の父の姿を書いてみたい。父は語学に才能があり，最晩年の父はラジオ講座でフランス語とロシア語を自習していたが，フランス語で＜レ・ミゼラブル＞を，ロシア語でトルストイの＜戦争と平和＞を読んでおり，又母の迷惑も思わないではなかったろうが，フランスのヒッチハイクの青年を家にとめたりしていた。今私は父の祭壇に手を合わせ，すごい人生を生き抜いた父に自分も影響を受け，神経内科医として54年間を何とか恥ずかしくなく終え，今は語学と音楽に精を出し，孫の成長を楽しみながら老後を送れていることを感謝している。